

教務だより

2012年11月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

心を決めて受験に向かおう

茗溪塾塾長 宇野 雅春

山は紅葉のシーズン、街でもちらほらと紅葉が見られるようになってきました。もうすぐ木枯らしが吹き始めると、受験がよいよ本番を迎えることになります。小学生は、合不合判定テストの結果が出始め、いよいよ受験校確定の時期に入ります。中学生はこの「便り」が出る頃には、内申を決定づける「定期テスト」が終わっているか、もしくは真っ最中のはずです。これが終了したあとは、いよいよ受験そのものに向け実力をつけていく正念場になります。大学受験は、AOや推薦が収束し実力突破の一般入試へ向け、誰もが受験勉強を中心に生活を組み立てる頃です。

といっても、実際はどうか？生徒達の受験生活もそう単純ではありません。成長期や思春期のいろいろな悩みが付きまといまいます。学校行事を引きずっている人も少なくないはず。「さあ受験です…専念しましょう！」となった途端、「やる気」がでない生徒もいます。受験のことを考えるけれど、かえって意地になって、学校行事に専念する生徒もいます。親や先生に言われれば言われるほど、やる気が失せていく…。そういう生徒がいる反面、猛烈に受験に向けてがんばり始める生徒もいることは事実です。この違いは何でしょうか？最近になってようやくわかったのは、受験の「認識」には、個人差があるということです。いつも受験のことばかり言っている生徒が必ずしも、受験を認識しているかという決してそうではありません。「知識」も多分中途半端なのでしょうが、受験のなんたるかを一番わかっていない生徒ほど、「受験で大変！」と言います。実生活でも本当に大変な人は「大変！」とは言いません。それ程でもないから「大変！」と騒ぐ傾向があります。そういう人は、なぜか受験の成功不成功を導くのが、「自分」と思っています。本気になっていない中で努力の形を作っているの、心の中では「本気を出せば出来るのではないか？」と思っています。だから、「授業」を熱心に聞いていません。寝ていたり、おしゃべりしたり…その授業がとても重要であることに気がつかないのです。根本に受験は自分が実力で突破するものという「核」となる考えが消去されています。大学受験でも、不得意科目にはなかなか手が着かず、学校行事に追われていたりすると、つついそこを後回しにします。受験が終わってみると、はっきりわかります。受験科目の中に、不得意があっても合格するのは非常に難しいということです。大学受験は中学受験や高校受験と違って、その学部で勉強するために必要な科目が受験科目になっているわけですから、当然その科目の不得意はあってはならない事なのです。最後の追い込みでも多分そこが意識されないと不合格となります。受験を「認識」ということは、そういうことです。わかっているならば、他のことがどんなに忙しくても、振り回されることはないはずなのです。この「認識」が本気ということ。頑張っているのに成績が上がらないと言っている生徒ほど、先生の手を大きく煩わしているはず。先生達も、報われない努力をたくさん強いられることになります。自分でわかろうと努力すること。そのために先生のサポートを受けること。まず「自分がわかろうとする」気持ちがないと、学習の効果は得られないということです。そのわかろうとする気持ちを作るのが、受験をしっかり自分の事として「認識」することなのです。実はここが本当のスタートラインになります。このスタートラインをきって初めて、学習効果が現われます。今既にそこを通過した生徒だけが、成績アップを果たしているはず。直前まで、この「気づき」を私達は、生徒に期待しています。気づいたときはじめて効果的な学習が生まれます。方法論やまわりの環境も大事だとは思いますが、まずは受験生自体が変わること。受験を合格に導き、将来を切り開くものは、先生ではなく、自分であるということに早く気づいてほしいのです。受験は自分の生涯を通じてきわめて大きな意味を持つものです。心を決めて、今はまっすぐ向かってほしいと思います。